

校長室だより  
NO. 32  
令和元年10月29日

# すべては光る

梅園小学校長  
たか すりょうへい  
高 須 亮 平

## 「自分の時間」について考える

10月26日（土）の学芸会には、終日、多くの保護者の方々にご来校いただきました。子どもたちは、これまで創り上げてきた劇や演奏を精一杯に表現し、充実感を味わったことと思います。一人一人の「やればできる力」をまた一歩高めることができました。次への大きな自信になったと思います。

さて、その学芸会については次回にして、今回は「自分の時間」について考えることにします。先日、とある教育に関する研修会に参加しました。そこでの出来事です。その会の開始時刻になっても参加予定者のうち2名が到着していなかったようでした。開催者は事故が起きて来られないのか心配していましたが、少したって1人からは携帯電話から「少し遅刻します」という連絡が入りました。しかし、もう1人からは、連絡なしとのことでした。連絡について開始時刻前であればまだよいのですが、遅れての連絡、また連絡がないのは何とも常識を逸しています。

そこでの話は、そうではなく、「昔はどうしていたのだろうか？」という話になりました。昔というのは、携帯電話やスマホがなかった時代ということです。例えば、駅で待ち合わせをします。何かの事情でその約束時間に遅れるなんていうことは、誰でも経験のあることではないかと思えます。そんな時は、待つ側も待たせる側も気が気でなかったはずだと思います。平常心とは言えません。

そこで、「昔は駅構内に『伝言板』があった」という話が出ました。伝言板とはしばらく前の昭和の時代を思わせ、何とも懐かしい気分になりました。その伝言板にチョークで「先に行きます」とか「駅前の喫茶店にいます」などと書いていたようです。ただ、遅れてきた人がそれを見てくれればいいのですが、見なかったらどうしようもないですね。さらに、目印などのない場所は連絡手段などありませんので、どうしていたのでしょうか。デートならば1時間も待つこともありましようが、ビジネスの約束、そうでなかろうと信頼を失うのは当然でしょう。

待ち時間も自分の人生の一部、貴重な「自分の時間」です。何分くらい待てばいいのか分かれば、その時間を有意義に使うこともできたり、気持ちを落ち着かせることもできたりします。しかし、分からないとただイライラするだけの時間になります。「自分の時間」を何にどのように使うかは、人生における極めて重大な課題なのかもしれません。

先月まで放映されていたNHKの連続テレビ小説の「なつぞら」にもそんなことを考えさせられる場面がありました。女性アニメーターの草分け、奥山玲子（故人）をモデルにしたドラマでしたが、主人公なつが仕事と家庭の両立に向けて奮闘する場面



伝馬通のフラッグ(1年)

でした。かつて女性は、結婚や出産を機に退職していたのが通例でした。現在も一部に残っているかもしれませんが、言葉として「寿退社」などと言うくらいです。ドラマの中でも、妊娠したなつに、「契約社員になれば、時間が自由に使え、子育てがやりやすくなる」と提案する社長に対して、「正社員として仕事を続けたい」と、迫るなつがいました。仲間の応援もあり、なつの主張は認められましたが、産休明け早々、なつは長編アニメの作画監督を任せられるのでした。



なつは「自分が、後に続く女性たちの道を拓くんだ」と奮起した以上、後には引けないのでした。それ以降は、問題はそれ「グランドロードのフラッグ(1年)までの「仕事か家庭か」ではなく、「仕事も家庭も」を選択するなつでした。その時代背景は昭和40年代でしたが、平成から令和になった今日、一般的な話題となっている「働き方改革」や「ワーク・ライフ・バランス」という時代の流れとうまくかみ合わせて構成されているように感じ、考えさせられながら観ていました。

そんなテレビドラマの内容は、執行草舟さん(69)の著書『生きる』(講談社)の中の内容と重なる部分がありましたので、ここで触れたいと思います。執行草舟さんとは、実業家、著述家、歌人であり、文学、音楽、美術など芸術全般に造詣が深く優れた感性と独自の美意識による美術作品の蒐集家でもあります。生命の燃焼を軸とする新しい生き方論を提唱している方です。

その本に「自分の時間」を考察する章があります。こんな言葉で始まっています。「現代人は『自分の時間』を誤解している。それにより多くの人は何よりも尊い、自分に与えられた生命の燃焼に支障をきたしている」

これはどういうことかと言いますと、例えば「仕事が忙しくて自分の時間がない」とかという発想がとんでもない誤解と言っているのです。

執行さんは、菌酵素食品の研究・製造・販売を手がける(株)日本生物科学および(株)日本菌学研究所の社長です。33才でこの事業を興しました。創業の少し前に子どもが生まれ、その3か月後に妻を亡くしているそうです。多くの人は「小さな子どもを抱えながら仕事をしていくのはたいへんだらう」と当然のように思います。しかし、執行さんは「逆だ」と言われています。

「子どもがいたから事業もやってこれた。家で子どもの世話をしたり、寝顔を見たりして気力を取り戻していた。自分の時間がないと考えたことは1度だになかった」と、当時のことを振り返っています。

「事業は、私の時間が社会に役立っている喜びを与えてくれた。子どもの存在は、私が一人の人間として生きている実感を与えてくれた。事業や子育ては、自分の時間を奪うものではなく、自分の時間を有意義たらしめてくれるものであった」  
そして、このように断言されています。

「仕事や家族との時間は、『自分の時間』の代表的なものだ。人生における有意義な時間の過ごし方とは、仕事と家族に多くの時間を当てることである」

人それぞれの考え方があり生き方があります。何を大切に生きるかは、自分で考え、判断するしかありません。自分にとっての働き方改革を求めるのは自分なのです。